医療最前線
>>>vol.61

川崎医科大学附属病院
乳腺甲状腺外科

1977年から2018年の間に乳頭がん1220例、濾胞がん、髄様がん、未分化がんでも多くの治療実績を重ねてきた当科。微小がんから難治性の進行がんまで豊富な専門知識で後進の育成に努めている。

Breast and Thyroid Surgery

東日本大震災以来、小児甲状腺エコーを実施するため福島県を延べ30回以上訪問。現在も小児甲状腺エコー技術認定委員として、試験官を務めるために年2回は当県を訪れている。

学生時代は軽音楽部に所属していて、ロックのドラムをたたいていました。その縁で川崎医科大学軽音楽部の顧問も務めています。今もときどき気分転換（ストレス発散?）でドラムを愉しんでますよ。

田中克浩 特任教授
Katsuhiro Tanaka
■専門分野
甲状腺、副甲状腺、乳腺
■認定医・専門医・指導医
日本乳癌学会乳腺専門医、日本外科学会外科専門医、検診マンモグラフィ読影医師

2011年より日本甲状腺外科学会理事、2012年より日本内分泌外科学会理事を務める。田中特任教授は甲状腺に関して内科、外科双方の診療を手がけており、これは県内でもめずらしいとのこと。

Report!

女性に多い甲状腺がんに内科・外科双方からのアプローチを

タイプによって病態や悪性度が大きく異なる甲状腺がん。

「甲状腺がんには、数種類のタイプがあります。がんの特徴としては、患者さんの男女比が一対五と圧倒的に女性に多いこと。閉経前後の発症が最も多いとされていますが、小さなお子さんから高齢者の方まで幅広い年齢層に見られるのも特徴のひとつです」と田中克浩特任教授。甲状腺、副甲状腺、乳腺などの疾患を専門とし、現在、当科の部長としてチームを率いている。

甲状腺がんはタイプによって、病態や悪性度が大きく異なる。甲状腺がんの約九割を占める乳頭がん（進行が遅く、治療により比較的治りやすい）、次に多いのが濾胞がん（良性の甲状腺腫瘍との区別が難しい）、髄様がん（まれなタイプで、リンパ節転移を起こしやすい、四分の一は遺伝性）、未分化がん（進行が速く、現在有効な治療法はないとされる）などがあげられる。

「甲状腺がん」の症状について田中特任教授はこう話す。「症状はほとんどみられません。頸部（首の部分）にしこりがあるのが手で触れてわかる程度です。まれに痛み、飲み込みにくい、声がかすれるなどの症状が現れることがあります」。

ほとんどの場合、頸部の触診のほか、超音波検査、しこりに針を刺してがん細胞の有無を調べる穿刺吸引細胞診でわかるとのこと。ほかのがん同様、早めの診断が肝心だ。

病気には厳しく、患者には優しく。気持ちに寄り添った診療を。

これまでの長いキャリアで、さまざまなタイプの甲状腺がん治療を手がけてきた田中特任教授。最近の治療法について尋ねてみた。

「治療は、原発巣を切除する手術療法が基本です。また、がんのタイプによっては、放射性ヨウ素内用療法などを行ないますが、比較的おとなしいがんのため進行度によっては、あえて治療をしないこともあります」。

甲状腺がんにおいては長い間、有望とされる全身治療は放射性ヨウ素内用療法しかなかったが、近年、甲状腺がんに適応する分子標的薬が登場。これにより手術以外の治療方法がなかった患者に対して、症状やQOL（生活の質）の改善などに役立っている。ただし分子標的薬の使用については、根治切除不能であることが適用条件となっており、甲状腺がんに対する第一選択の治療法が外科的根治切除であることに変わりはない。

最後に医師としての心得。「病気には厳しく、患者さんには優しく。体だけでなく、患者さんの気持ちや心にも寄り添った診療を心がけています」。医師としての使命感と責任感。田中特任教授の研鑽の日々は続く。

お問合せ
川崎医科大学附属病院
倉敷市松島577
☎086-462-1111
https://h.kawasaki-m.ac.jp/

■2019年4月25日号掲載
本文中の医学情報、写真は掲載当時のものです。